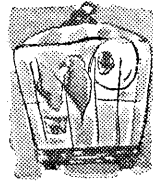


言語指導の基礎 (三)



——ことばの発達・段階・系統——

村 石 昭 三

幼児の言語指導はことばの発達や発達段階にそっておこなわれなければならないといわれており、このことは言語指導の大事な基礎になっているが、最近の研究成果をいろいろ調べていくと、ことばの発達・段階・系統という考えかたが次第に変わりつつあることを感じさせる。そこでここでは、発達・段階・系統とはどういうことか、考えてみることにしよう。

1 発達ということ

ことばは年令発達にそって、だんだんと伸びていくけれども、幼児のもつことばが伸びるということは、必ずしも語彙がふえていくとか、文の構造が複雑になっていくとか、あるいは、発音が正確になっっていくことだけを意味するものではないようである。語い・文の構造・発音などをわれわれはことばの要素とよんでいるが、それ

らのことだけがとかくことばの発達と考えられがちなのは、研究家が発達研究のめやすとして、とりだすことが比較的容易なためであって、生きたことばの発達の全体をほんとうにつかんだことにはならないものである。それでは、ことばの力というものは、語いがふえる、文の構造が複雑になる、発音が正確になる類のほかになにがあるだろうかといえ、それは本質的には社会生活に生きて働く力となることばである。この点に目をすえたとき、社会生活にはさまざまなことばの生活の型があるから、その型に適應し、その型を改善することのできる力、これがことばの力であり、発達にほかならない。

昭和二三年に日本人の読み書き能力調査という、世界でも珍らしい大規模な調査がおこなわれた。これは当時のC・I・Eの協力もあってのことだが、日本人は世界各国にくらべて文盲が多いのでは

ないか、ということが調査の発端であった。それでその際のテスト問題に「履」という漢字が書きとりの問題ででてくるが、これは履歴書が書けるか、書けないか、というひとつのきめ手として、できてきたものである。社会生活では履履歴書が書けなければ、国民として必要なギリギリの生活も果たすことができない、と考えてのことである。したがって、「履」という字が書ければ、だいたい、何千字の漢字が書けることになるという考えにたつたものではけっしてないのである。

ここであげた漢字は語いや文の構造と同様にことばの要素となるものであって、したがってことばの要素をどんなに知っていてもそれが実際の生活の中で使えるということではなければ、ことばの力としての意味はうすいことになるものである。

幼稚園で幼児が自分の経験を発表できることが望ましい、教師や友だちにあいざつができることが望ましいといわれるのは、幼稚園の生活ではそれができないと、望ましい生活が送れない、望ましい対人関係をもつことができなくなるというので、ことばの指導にとりあげられてくるのである。幼稚園でしゃべらない子どもでも、家庭ではよくしゃべる子が多いものだが、そういう子どもは幼稚園の生活を満足に果たすことができないからというので問題にするのであり、単にどこまでもしゃべれるようにという意味からではないはずである。

ことばの力はこのように、より生活機能的に考えられてきており、幼児の生活に必要な活動・経験をとおして、その力を伸ばすことが望ましいというようになってきた。したがってそうした生活の機能を考えた上で、幼児のことばの興味・関心・態度・技能を育てていくことが望ましいものである。

2 発達の段階ということ

ところで、ことばの発達は社会生活に必要なことばの力がだんだんと伸びていくことをいうといたけれども、そのだんだんということは、直線的に伸びるということではないようである。ことばのはばと深さというか、質と量というか、そういうことばの二面性の交錯をみていくと、だんだんということは、直線的でなく、段階的ふしをもつて、とみた方が適当なような気がする。

ことばの発達段階ということばは別に目新しいことではないが、段階をつけるためには、かりに直線的に伸びていくものならば、どこで段階のけじめをつけるか、そのきめ手をみつけることは困難なことにはちがいない。段階はひとつの発達曲線でみるならば、いちじらしい上昇、下降につけることができ、質的には、以前の質的な発達の崩壊と新たな質的な面の展開の接する位置におくことができずに年令の三才・四才・五才の段階にことばの実態をのせただけでは、ことばの発達段階とよぶことには無理な点があるものである。

ふつう、幼児期から小学校卒業までを一括して言語形成期とよんでいる。これは社会生活に生きて働くことばの基本的な力を身につける時期という意味であるが、以上のような段階の考え方でみるならば、それをさらに三つの段階に区別することができる。

1、語い獲得期（一才―三才）

2、言語習慣形成期（四才―小学三年）

3、言語生活適応期（小学四年―小学六年）

これらについて詳述する余裕はないが、大きな段階の切れ目は三才と四才、小学校三年と四年の間においてある。一才から三才までは、全体の発達段階の上からすると、語いが広がるということに特徴をみることが出来る。外界の事物にたいして、名前のあることに気づき、事実の世界にひとつひとつ、ことばのレットルをはりつけていく時期である。しかし、三才を過ぎて四才に入ると、語いの広がりは三才までにみられたほど、広がる度合いは目ざましいものでなくなり、語いはヨコに広がる方向から、タテに深まるという方向に進んでいく。ことばとことばとの関係を知り、実際に知覚や行動を通さなくても、ことばで思考することができるようになる。つまり、言語習慣を身につける時期に入るのであって、平がな・片かな・漢字などに触れ、文字ことばにも接近するようになってくる。四年を過ぎると、新たな言語生活適応期に入り、社会生活に生きて働くことばの使い方に慣れてくる。作文なども、主題をそろえて、

要約し、まとめて効果的に書くことができてくるし、読むことも、音読より黙読する方が速く読め、理解もしやすくなってくる。

幼稚園児はこの意味からみて、三才と四才で、ことばの発達のふたつの段階にまたがっているわけであるが、そのことは、実際の言語指導の上で、五才児にたいして、いたずらに語い量だけをふやすことに苦心したり、また、三才児あたりから、言語生活適応期で要求される、おとなとの交渉に必要なことばの学習をさせようとすることは、ことばの発達段階からはみ出したものとみられるものである。

3 発達の系統について

発達の系統とは、ことばの力がどのようなすじみちとか系列をおって身につけていくかということである。発達の段階というのは、主にことばの学習の展開というか、転換に目をつけることであるが、系統とはその中で比較的、恒常的な力の積み重なり方を問題にするのである。

最初はず、量的に多くなるということである。入園当初は一言もしゃべらなかつた子どもが非常にたくさんしゃべるようになること、本をものの五分も静かにみることができなかつた子どもが、三十分もつづけて見つけられることができること、教師の話をじっと聞きつづけること、語い量が増えること、など、すべて発達の最初の

系統として望ましいことがらである。しかし、その次の系統は、それらが深まることである。量的にはかえって短かく、また少なくなることもあるけれども、それは事物や現象をことばでまとめる、要約することと対立するからである。しゃべることも、内容を正しくまとめて話すようにとか、すじをおつて話すようにとか、大事なことは聞きおとさないようにとか、語いなどもだんだんと固体的な事物の語いを抽象的な上位概念の語いに体系づけるように、ということが問題になってくる。そうして、最後の系統は、そうしたことばの力が場面や目的に適應して正しく使い分けられることである。つまり、ことばの力の正しい使用ということであつて、長い話を聞くときは、短かい話を聞く時とはちがつた態度でのぞむことができること、経験の発表なども、大事なことは長く話し、あまり必要でないことは簡単に話すということばの活動の調節ができることである。

このような発達の系統をはっきりだしてあるのが小学校の学習指導要領である。小学校の国語の学習指導要領は、聞く・話す・読む・書く指導について、低学年では、ことがらをことばで余すところもなく理解し、表現することができることに目標があり、中学年では、その中心点や要点をおさえて理解し、表現することができることにあり、そして高学年では、目的や場に応じたことばの理解・表現ができるようにという基本線をだしてある。

発達の系統というものは、年令にそくした発達の段階ではないか

ら年令に規定されることはないものである。それゆえ、幼稚園でおこなわれるものは、学習させることがらは小学校と比較して次元の高低はあるにせよ、そうした発達の系統は低い次元においておさえられるものである。たとえば、話を聞くということでは、三才児では話をよく聞く、四才児では簡単な話の内容がつかめる、五才児では話を聞いておもしろかったこと、自分がそれを聞いて何をしなければならぬかがわかるという系統は容易に考えられるであろうし、話すということでも、教師や友だちの話しかけに応ずる、すずんで話しかける、話のやりとりができる、という系統もあり、大きな声で発表する、相手に聞こえるように発表する、場面や話題にそくした声で発表するという系統もある。

いっぽう、系統ということは、ことばの理解と表現という関係についてもみることができる。語いなどについてみれば、理解が先になり、耳で聞いてわかる語いの方が話せる語いより多いものである。長く話す、長く聞くという時間的な面でも、聞くことのできる時間の方が長いものである。幼児も含めてわれわれ人間の一日の言語生活は、その大半が聞く時間に使われ、あと話す・読む・書くの順で短くなるという生活構造を考えると、なぜ、話す方が理解することよりおくれるかという本質的なコミュニケーションの問題の底に、このような現代の言語生活の社会機構がよこたわっていることに気づくことができる。